

若手教員が抱える困難とその低減方法の検討

～授業内での私語指導に着目して～

学籍番号 199209
氏名 小林 格
主指導教員 渡邊創太

1. 基本学校実習Ⅰ

1.1 研究背景

本研究は若手教員の抱える困難を低減するために有用なことは何かを明らかにすることが目的である。基本学校実習ⅠではA中学校の1年生を中心にどんな子どもがいるのか把握する。また、教員がどのように子ども達と接して指導しているかも把握する。

1.2 方法

A中学校の教育活動全般を観察した。観察対象者は1年生であった。観察内容は授業、休み時間、終学活における生徒と教員の様子であり、学習指導面・生徒指導面に着目して観察を行った。

1.3 結果

1年生で不登校の生徒はいなかった。いじめについては、重大なものはなかった。学年全体で学力は高くなく、授業中には私語が絶えないことがあった。A中学校には、若手教員とされる教員がいなかった。

1.4 考察

生徒指導面・学習指導面で支援や援助が必要な生徒に気づくことができた。また教員が規律重視の指導を行い、生徒指導に気を配っていることも分かった。またA中学校には若手教員が1人しかおらず、実際の若手教員を対象とした研究が難しい。

2. 基本学校実習Ⅱ

2.1 研究背景

A中学校には若手教員がほとんどいないので若手教員時代についてインタビューで調査する。インタビュー成果は現在のA中学校の現状にも適用し、A中学校で教育活動を行う私自身にも有益なものになるだろう。

2.2 方法

A中学校の教員に対して調査的面接を行なった。質問内容は「若手教員時代に苦労したこと」「その際に最も支えになった他教員」などについてであった。

2.3 結果

若手教員時代は「生徒指導」「学習指導」「他教員との人間関係」「学級経営」「生徒との関係性」「事務的業務」「部活動」「無し」「その他」に困難を抱えていた。特に「生徒指導」「学習指導」「他教員との人間関係」に困難を抱える教員が多かった。

2.4 考察

学習指導・生徒指導・他教員との人間関係の問題に対する介入は、若手教員が抱える困難を取り除く上で特に有効と考えられる。また、生徒の私語等により授業を成り立たせることが困難だったという回答があり、指導方法に介入することが有効と考えられる。

3. 発展課題実習 I

3.1 研究背景

授業中の私語の指導は、生徒指導・学習指導・学級経営の全てと密接に関連すると考えられる。観察を通して、A中学校教員における生徒・学習指導および学級経営上の困難の低減となる、私語指導を中心とした施策を発見することを目的とする。

3.2 方法

2年生の授業の生徒の私語の様子と教員の私語指導について観察した。各授業中の教師・生徒全体が観察対象であるが、特に、これまでの基本学校実習 I, IIにて観察された、学習指導面で特に問題があるように見受けられる生徒に注目して行なった。

3.3 結果

各授業の平均私語発生数、平均指導回数などの結果が得れた。数学では私語が多く、国語と英語（上）では私語発生数が少ない傾向にあった。さらに各生徒でも私語の様子のデータがとれ、私語が多い生徒やクラスが明らかになった。

3.4 考察

教員の指導の観察と授業の私語の様子から、「私語をしてよいかどうかのメリハリがある場づくり」「私語が止むまでの指導」「適切な難易度調整」「即時の指導」が私語指導の有効な方策であると考えられる。

4. 発展課題実習 II

4.1 研究背景

「私語をしてよいかどうかのメリハリがある場づくり」「私語が止むまでの指導」「適切な難易度調整」「即時の指導」が私語指導の有効な方法であることが推測され、これらの手法の効果を測定する必要がある。

4.2 方法

2年生1～3組の数学の授業で実践を行なった。発展課題実習 Iと同様に授業後に私語グラフに記録し、データ処理をした。

4.3 結果

他教科と比べ、平均私語強度と平均私語時間を減らすことができた。また私語発生数もさほど多くなく、観察した数学の授業よりは私語発生数を減らすことができた。

4.4 考察

「私語が止むまでの指導」「即時の指導」の私語指導方法は、実践者である私にとって、生徒の私語を減らすことが出来る有効な指導であると結論することができる。